

『観経疏』「今乗二尊教」の意義

武田 未来雄

親鸞は、法然との出遇いを通して、その出遇いの歴史的事実を『無量寿経』の本願成就文において確認し、その本願成就文に常に立つて浄土真宗の仏道を開顕していった。その本願成就文について、特に親鸞における時の問題から考察する。

本願の成就を時の問題から考察するのは、本願成就とは必ず「時」と「機」において成就すると考えられるからである。「機」については、それまでの研究に於て論究されてきているが、「時」については、あまり論じられていないように思われる。確かに、「時」とは末法の時、五濁の世・無仏の時を表して、その事については幾つかの先行研究に於ても考察されている。「末法」や「五濁」という事と「時」とは、切り離して考えられないであろう。しかし、末法や五濁は時代社会として見られて、「時」それ自体については論究されていないのではないか。そもそも時とは、実体的にあるのではないと言われている。それは、存在に即して見るべきものであり、主観的な観念によって時は形成される。従って、末法の時や五濁悪世という実体的な時間があるのではない。必ず、そこに生きて、それを実感する者に於て、「末法の時」や、あるいは「五濁の世が在る」と言える。親鸞の見た「時」とは、末法や五濁の時代においてこそ、その「本願成就の時とは今であ

る」という、本願成就の自覚の時ではなかったか。親鸞は、法然との出遇いにより、本願成就の「今」に立った。そして、如何なる者においても、必ず本願成就の時は成り立ち得るのであり、そこに「浄土の真宗は証道今盛り」という「今」が実感されるのではないか。では、なぜ末法の時・五濁の世といわれる時において本願成就の時が見出され得るのであるか。つまり、単に五濁悪世や末法の時は、時代社会として解明されるだけでなく、本願成就の「時」として捉えられているのか、を見るべきであろう。この本願成就の「時」が明らかにしなければ、五濁悪世・末法の時が持つている内面的な意味も明らかにできないと言えよう。そこで、この本願成就文については、「時」を中心として考察するのである。

『教行信証』「総序」には、本願のはたらきが現れる歴史的な機縁について述べられている。親鸞は、まず難思の弘誓は、「難度海を度する大船」であり、無碍の光明は「無明の闇を破する慧日」と、本願とその成就を表す「弘誓」と「光明」のはたらきについて述べる。そして、その次に、「観無量寿経」の序分によって、「浄邦の縁熟」と、「浄業の機」について述べ、本願とその成就とは、必ず縁が熟す時と機において開顕されることが、表されているのである。

親鸞は、本願成就の浄土真宗興起の機縁を、『観無量寿経』の序分に説かれている、韋提希が「我、今、極楽世界の阿弥陀仏の所に生まれんと楽う」という「別選所求」において見た。では、この縁が熟し機が彰われるということは、具体的にはどのような事であるのか。韋提希が願生した機縁は、息子の阿闍世が逆を起し、父を幽閉するという、あの王舎城の悲劇と呼ばれる事件であ

った。韋提希の願生は、その自己の思い計らいや、自己がたよりとしたものがすべて破れ、この世に依るべき事が何も無いことが明らかになった所から出たものである。『観経』の序分には、自己の思いで過去に為した行為や未来の期待がすべて敗れ去る、そうした人間の苦惱を、如来の本願によって主体的に受け止めていくという、浄土教興起の機縁が説かれているのである。ここに、阿弥陀仏の浄土に生まれようと願う者となり、浄土願生の「今」に立つという、「機の開発」があり、時が熟した内実がある。

この韋提希の浄土を願生したことの歴史的意義を最もよく表しているのが、善導の『観経疏』玄義分の十四行偈に出ていゝ「今乗二尊教」という文であると、考えられる。善導は、序題門に、韋提希の要請によって、釈迦は広く浄土の要門を開き、弥陀は別意の弘願を顕彰すると、述べている。韋提希の要請が、釈迦と弥陀との二尊教を開顕する。この二尊教とは、何を示しているのであろうか。実は、この二尊教の在り方こそが、本願成就の「時」の内実を最も表していると考えられるのである。釈迦は歴史に誕生した仏であり、阿弥陀仏は、その釈尊によって説き表された法を象徴している仏であると言える。その二尊について、しばしば指摘されているが、善導は釈迦・弥陀の順で顕わすのに対して、親鸞は、『教行信証』教巻の大意釈にあるように、弥陀・釈迦という順序で述べている。この位置づけの意味することは大きいと言えらるであろう。善導は、釈迦仏とは、韋提希の要請によって、王舎城という具体的な生活の場に表れた仏であり、阿弥陀仏とは、その釈迦の発遣によって明らかになる救主としての如来であると言ふ。その事を受けて、親鸞の示した弥陀・釈迦という順序次第は、弥陀の本願が、単に釈迦の説いた教法の一つではなく、釈迦

をして釈迦たらしめた原理であり、釈迦の背景となる法そのものである事を表したのである。釈迦仏とは、弥陀の本願によって、その本願を説くために出世した仏であるという、親鸞の了解があるのである。

そのような、二尊教の開顕によって、聖道の諸教は、「すでに時を失し機に乖く」と言われるの対して、浄土の真宗は、「在世・正法・像・末・法滅、濁悪の群萌を、斉しく悲引」と言われるのではないか。親鸞は、善導によって開顕された二尊教を、弥陀・釈迦とすることによって、時を超えて斉しく群萌を悲引する本願のはたらきを見出したのである。歴史上に誕生した釈迦の教法によって、時を選ばずに悲引する弥陀の本願が明らかとなる。釈迦は歴史に誕生した仏であり、迷いの衆生との接点を持ち、そこで広く浄土の要門を開き、多くの衆生を發遣する。しかし、単に釈迦一尊教であるならば、それは歴史的な時ではあるが、そこに時間を超えることはなく、過ぎ去った時に終わるであろう。ここに、教主釈尊が發遣して指し示す弥陀の本願を見出してこそ、時機純熟の教として、時を超えて斉しく悲引する浄土真宗の開顕がある。善導は、正にその二尊教に乗じる「今」において、浄土門は広開されると言う。そして親鸞は、釈尊によって指し示された弥陀の本願こそは、釈尊をして釈尊たらしめた法そのものであると、見た。弥陀の本願は、時の限定を受けることはなく、普く一切の群萌を救済するはたらきとして開顕されたのである。このように本願の成就とは、最も具体的な人間の場に於て起るのであり、従って、そこに時機純熟としての成就の「時」があるのである。